

Title	社会学の発展
Sub Title	
Author	Vincent, George E.(Yamada, Kenji) 山田, 賢司
Publisher	慶應義塾大学大学院社会学研究科
Publication year	2006
Jtitle	慶應義塾大学大学院社会学研究科紀要：社会学心理学教育学： 人間と社会の探究 (Studies in sociology, psychology and education : inquiries into humans and societies). No.63 (2006. ) ,p.111- 122
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	論文
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	<a href="https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN0006957X-00000063-0111">https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN0006957X-00000063-0111</a>

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

## 社会学の発展<sup>1</sup>

### “The Development of Sociology”

*American Journal of Sociology*, Volume 10, Number 2 (Sep., 1904), pp. 145-160

G. E. ヴィンセント・山田賢司\*訳  
*George E. Vincent Kenji Yamada*

雑多な 19 世紀以前に起源を持つ社会理論の流れは、我々の集合的な生活のあらゆる側面に関して、錯綜した知識と思想の蓄積をもたらしている。プラトン (Plato) による洞察力のあるイデア論、アリストテレス (Aristotle) の現実主義的な洞察、モア (More) による少々ユーモラスで穏健な思想、マキャベリ (Machiavelli) の優れた分析、ホブズ (Hobbes) による読む者を惹きつけるような (upheaving) 対話、ヴィーコ (Vico) の広い視野、ルソー (Rousseau) による影響力のある (contagious) パラドクス、モンテスキュー (Montesquieu) の自然主義的な説明、アダム・スミス (Adam Smith) の科学的一般化、コンドルセ (Condorcet) の楽観的な夢想、レッシング (Lessing) とブンセン (Bunsen) による神秘主義的な解釈。これらの理論は全て、対立するか、重複するか、あるいは断片的であるかしており、そのために錯綜した状態が長いあいだ続いてきた。それゆえ 19 世紀の哲学者及び科学者にとって、これらの理論を改編し、より広汎なものにし、そして体系的なものにすることが課題になっていた。これらの理論はさまざまな形で表現されているものの、その根底には、人間がおかれている状況を表現するための種々の法則という、共通する思想がある。このような、連続性と併存にまつわる避け難い問題がいかなる理由で生じているにせよ、この問題を認識することこそが、19 世紀の社会哲学 (social philosophy) が過去から受け継いだ基本的な原則であった。

この、膨大な量の知的伝統を精緻化していく作業は、分析 (analysis) と総合 (synthesis) の両方を含む。それらのうちの大部分は、分類 (classified) され差異化 (differentiated) されなければならなかった。ただし経済科学 (economic science) だけは、はじめから弁別的な形式が想定されていた。ある事実に関して観察と省察が増えてもなお、他の事実は専門化された個別の研究領域の範囲外にある。このように、今世紀において達成されつつある顕著なこととしては、混乱した伝統を適切に、よりよく定義された複数の社会科学へと分化させることがあげられる。しかし一方で、こうした要素への分解に対して抵抗し、抽象的な要素を包摂するより大きな連関を再生させるための、継続的な努力もなされている。こうした努力とはすなわち、全体としての社会理論のまとまり (unity) を保持することである。これらの双方は

\* 慶應義塾大学大学院社会学研究科社会学専攻博士課程 (地域社会学)

<sup>1</sup> 本稿の内容は、1904 年 9 月にシカゴ大学社会学部で開催された「技芸と科学国際会議」(the International Congress of Arts and Science) にて講演されたものである。

分析と総合、科学と哲学といった一般用語でいうところの対句になっている。

「社会学」という用語は少なくとも四つの意味合いで使われており、そのうちの二つは先ほどの議論と直接関係している。すなわち、(1) 社会的事実と理論の領域の全てを含み込む漠然とした一般用語として、(2) 全体としての社会を統一的に把握することを目指す社会哲学として、(3) 科学としての認識を追求し、事実を分類し、その結合 (association) の背後にある法則を発見する「純粹 (pure)」ないしは「一般 (general)」社会学として、そして、(4) 社会組織や福祉の問題に対する科学的な処方方を記述する、「実践 (practical)」社会学としてである<sup>2</sup>。本研究では、哲学として、また科学としての社会学の発展に寄与するために議論の内容を絞る必要がある。

方法論 (method of treatment) に関しては、複数のやり方が併存しており、それぞれが一定の優位性をもっている。社会学は (1) 分類的 (classificational)<sup>3</sup>、(2) 生物学的 (biological)、(3) 有機体的 (organic)、(4) 心理学的 (psychological) なものに分化しており、一定の明確な基準と、一連の正常な発展をもたらしている。社会理論においても、一方が客観的ないしは自然主義的、もう一方が主観的ないしは理想主義的であるという、伝統的な哲学的二元論そのものが提示されている。加えて、個人主義と集合主義の分離は間違いなく重要なものである。さらに、人間と理論の取り扱いに関する歴史的な変遷は、疑いようもなく重要なものである。しかしながら、これらの方法論のなかに十分に柔軟かあるいは包括的だと思われるものは、これまでのところ存在しなかった。一方、そうであればこそ、これらの分類のいずれかについての手引きが、時代の要請に応じてつくられるであろうし、本研究では特に、社会科学と哲学に関して明らかに典型的な問題を選択し、(1) どのような種類の問題が社会学者から注視されているのか、(2) いかなる理論の発展が両者を結びつけるのか、という点について提示することを試みる。この目的のために選択される問題群は、以下のとおりである。

1. 社会を全体的に認識することに関する問題。
2. 民族間の対立と集団間の葛藤に関する問題。
3. 集団の心理的な性質に関する問題—社会意識。
4. 個人と社会に関する問題。
5. 自然環境が社会集団に及ぼす影響に関する問題。
6. 社会の進歩に関する問題。
7. 科学としての社会学の範囲に関する問題。

社会の有機的なまとまり (whole) という考え方は、長い歳月を経てもなお残っており、広い範囲に普及し、外部からの意図的ではない何らかの力と内部における意識的なコンセンサスによって統一された考え方であるが、このような考え方は、コント (Comte) にとっては基本的なことであった。彼の「三段階の法則 (law of the three stages)」は、後に崇拜の対象—ヒューマニティ (humanity)—になったのであるが、その知力の及ぶ範囲は世代を超えて浸透していった。実際のところ、この考え方は哲学史全体を通じて内在化されていたのではあるが、人類の統一性についての観点を、現実的かつヴィヴィッドな形で表明したのはコントが初めてであった—ただし、ヴィーゴは例外かもしれないが。『科学の序列』は、この考え方を異なる方法で強調する唯一の著作である。意識 (mind) は単なる身体的 (physical)、医

<sup>2</sup> この領域が独立した技芸 (art) であってはならず、「一般社会学 (general sociology)」と体系的に結びついていなければならない。

<sup>3</sup> Barth, *Die Philosophie der Geschichte als Sociologie*, p. 58.

学的 (chemical) な組み合わせから徐々に有機体へ、そして、それと同時に社会的な構成単位へと変貌する。この概念は一見するとありふれた考えのようにも思われるが、コントの時代においては決して明白なものではなかったものであり、今日においても、まず一般的には受け入れられていない。平均的な観察者は広く社会全体をとらえるのではなく、個々人や集団の方に注目しているのが実情である。

生物学的社会学 (biological sociology) は、社会の統一性 (unity) と集権化 (centralization) についての概念を精緻化してきた。コントは、この社会有機体についての考え方の輪郭を形成したに過ぎない。スペンサー (Spencer) は非常に緻密な推論を提示しており、その推論の中ではとりわけ、構造との対比が強調されていた。リリエンフェルト (Lilienfeld) は、ノヴィコフ (Novicow) が社会的エリートの理論においてそうしたように<sup>4</sup>、神経システム (nervous system) を全面的に強調した。さらにフイエ (Fouillée) は、社会有機体を、集権化が図られている程度に基づいて一言い換えると、神経組織 (nervous organization) に基づいて一分類した<sup>5</sup>。シュEFFレ (Schäffle) は構造的類推 (structural correspondences) よりも機能的推論 (functional analogies) の方を強調し、複雑な共同生活 (a complex common life) における社会的活動 (social activities) の統合に関して多くの成果を生み出した<sup>6</sup>。ウォルムス (Worms) は生物学的な推論を、ほとんどアイデンティティの表現とってよいくらいにまで提示していた<sup>7</sup>。これらの理論はさまざまな形で主張がなされているものの、その根底には決まりきった文句があり、空想的な内容があり、そして気味が悪いほどの類似性がみられる。そして、これらの理論をみればいつでも、社会の統一性や、構造と機能についての思考を確認することができる。生物学的社会学者は常に社会のことは見ていたわけではないかもしれないが、少なくとも彼らは、社会を全体的に捉えようとしている。

コントによれば、いわゆる分類主義者は、社会現象を体系的に分類することによって社会学の問題を解決する方法を模索しており、彼らもまた、社会の統一性についての思想に貢献してきたということである。例えばリトレ (Littré) は、次のような形で現れる四つの社会システムを明らかにした。それはすなわち、経済的 (economic)、政治的 (political)、技芸的 (artistic)、そして科学的 (scientific) な各システムである<sup>8</sup>。ド・グリーフ (De Greef) は、さらにその数を7にまで増やした<sup>9</sup>。ラ・コンブ (LaCombe) は、自身の人間の動機づけに関する理論を、ド・グリーフの理論と部分的に共通するような形で整理している<sup>10</sup>。これら以外の理論でも分類はなされているものの、体系的な形にはなっていない。A. ワグナー (A. Wagner) は人間の動機を5種類に分類し<sup>11</sup>、スモール (Small) は六つの典型的な、充足のための欲求を発見した一なお、ここでいう欲求とは、社会的活動 (social activity) や制度のなかで充足されるものである<sup>12</sup>。現象であれ、システムであれ、あるいは動機であれ、これら全ての分類が、分析された要素ごとの依存関係や相互関係によって統合された社会を想定していることについては、注目しておか

<sup>4</sup> Novicow, *Conscience et volonté sociaux* (Paris, 1897), pp. 32 f.

<sup>5</sup> Fouillée, *La science sociale contemporaine* (Paris, 1878), pp. 161-68.

<sup>6</sup> Schäffle, *Bau und Leben des sozialen Körpers*, 2d ed. (Tübingen, 1896).

<sup>7</sup> Worms, *Organisme et société* (Paris, 1896), pp. 42 f.

<sup>8</sup> Littré, *La science au point de vue philosophique* (Paris, 1873), pp. 367, 368.

<sup>9</sup> De Greef, *Introduction à la sociologie*, Vol. I, pp. 46-65.

<sup>10</sup> LaCombe, *De l'histoire considérée comme science*, pp. 69 f.

<sup>11</sup> Wagner, *Grundlegung der politischen Oekonomie*, 3d ed., pp. 83 f.

<sup>12</sup> Small and Vincent, *An Introduction to the Study of Sociology*, pp. 175 f.

なければならない。

生物学的な推論から心理学的な推論に力点の置きどころが移行するのにもなって、このような社会全体についての理論は変更を余儀なくされつつある。分業や相互依存についての考察は、習慣や感覚、思考についての考察にますます取って代わられつつある。例えばタルド (Tarde) は、絶え間ない模倣 (imitation) の連鎖という手段によって、より大きな社会集団の形成へと向かう恒常的な傾向を把握している<sup>13</sup>。人類の統合を促進することについてのこのような認識は、19世紀後半の進化論の哲学に部分的に追認することができ、また商業活動の急速な発展とこれを含む国際関係の緊密化にも部分的に追認することができ、さらにある程度までは、コンドルセが示唆し、コントが賞賛し、そして「多国間議会 (a parliament of nations), 世界連邦 (the federation of the world)」についての夢想的ななかに立ち現れる理想主義においても追認することができる。

有機体的な社会的統一と集権化の進展の哲学的思考としての価値は、疑いようがないとはいえ明らかに限界がある。生物学的な類推は明らかに、その有効性に関して限界に到達し、しかもその限界を超えてしまっている場合も度々あるように認識されている。それは、結合に関する事象に密接した研究者による科学というよりも、外部の観察者による記述的な哲学である。マロック (Mallock) は、スペンサーの社会学が時代の実践的な要請という試練を受けた場合、完全に崩壊してしまうだろうと述べている。スペンサーは社会を全体として扱う一方で、いわゆる社会問題と呼ばれるものは全て、社会の一部一すなわち、階級、政党、セクトや、その他の集団一の間での不均衡や葛藤から生じるとしているために、彼の理論は日常の問題に対処することができないのである<sup>14</sup>。全体としての社会という概念は、せいぜい漠然とした考え方にしか過ぎず、最終的な分析によって、地理的な境界と単一の政治機構による統治で規定された、国民集団 (a national group) という概念のなかに溶解してしまう傾向にある。

多くの研究者集団が社会を描写するにあたって、調和と統一ではなく、葛藤 (conflict) と闘争 (struggle) という形で表現しなければならなかったのは、この状況下においては避けられないことであった<sup>15</sup>。例えばグンプロウィッチ (Gumpłowicz) は、人類の歴史を、群衆や人種、民族、階級そしてその他の集団間の、終わりのない葛藤の連続だと捉えている。これらの闘争は、その形態こそ変わるかもしれないものの、その不可避的な性質、すなわち強者による弱者からの搾取であることについては変わりようがない<sup>16</sup>。ラッツェンホーファー (Ratzenhofer) によると、社会とは、個人から始まって集団へとつづき、そこからさらに、より大きな集団へとつづく関心 (interest) の領域であり、主たる関心を実現させるための永遠の闘争が行われる領域である。個別の関心は、主導者 (the led) の影響力が広がることで、リーダーシップや権威が生み出された闘争集団 (struggle-group) を構成する<sup>17</sup>。ノヴィコフは葛藤についての概念を精緻化した。彼は葛藤を、むき出しの暴力と強奪の状態から徐々に、搾取、独占、そして特権

<sup>13</sup> Tarde, *Les lois de l'imitation* (Paris, 1890), pp. 42 f. (=部分訳, 1924, 風早八十二訳『模倣の法則』而立社)。

<sup>14</sup> Mallock, *Aristocracy and Evolution* (London, 1896), pp. 8-16.

<sup>15</sup> ロス (Ross) は、スペンサー (Spencer) とタルド (Tarde) が集権化された (centralized) 画一的な (homogeneous) 国家に居住している一方で、「葛藤 (conflict)」学派の主導者であるグンプロウィッチ (Gumpłowicz), ラッツェンホーファー (Ratzenhofer), ロリア (Loria) らは、民族や国家に対する敵意をもった人たちの間で支持されていることを指摘している。—Ross, "Recent Tendencies in Sociology," *Quarterly Journal of Economics*, August, 1902.

<sup>16</sup> Gumpłowicz, *La lutte des races* (tr. Baye), pp. 159 f. and 340.

<sup>17</sup> Ratzenhofer, *Die sociologische Erkenntniss* (Leipzig, 1898), pp. 252 f. (=1924, 宮崎市八訳『社会学的認識論』新潮社); *Wesen und Zweck der Politik* (Leipzig, 1893), pp. 657 f.

という形を経て、ついにはより高度な心理的葛藤—討論 (discussion)—になるものとして認識した<sup>18</sup>。シゲレ (Sighele) のセクトと政党に関する研究の中では、対立と葛藤の役割の大きさが述べられている<sup>19</sup>。マルクス (Marx) は有名な階級闘争についての教義において、上記と同様の一般的な考察を援用している<sup>20</sup>。ロリア (Loria) もまた、ある階級の関心が支配的な所はどこでも、共通の福利 (common welfare) に対する関心がないことを明らかにしている<sup>21</sup>。一方ヴァカロ (Vaccaro) は、上流階級による支配の行き渡りを認識する一方で、より大きな社会の統合が達成されるまでの譲歩を通して、この闘争が緩和されることについても指摘している<sup>22</sup>。ここで彼は、社会進化の初期の段階では、当然のこととして集団間の葛藤が頻繁に起きるが、近代的な生活下においてもなお、これら「闘争集団」の多くが形を変えて存在しているところに葛藤の根深さをみることができると述べるスペンサーについて触れている<sup>23</sup>。統合論的な学派 (the unity school) と葛藤論的な学派 (the conflict school) の基本的な差異は、社会の統合がなされている程度に応じて変わってくる。社会における集団間の闘争をもっぱら観察している人物の中でただ一人、グンプロウィッチだけは最終的な調和へと向かう進化を認めていない。残りの人達は闘争の側面を強調する一方で、諦めさえしなければ葛藤がある程度緩和される、ほんの僅かな可能性の方に議論を移行している。葛藤理論—およびこの理論が内包している集団心理学—は、現代あるいは歴史上の社会的事実を解釈する手段として、明らかに実践的な価値がある。現代における、都市あるいは国家の有機的な統合というのは、顕在化している階級間、セクト間、民族間、そして政党間の競争と対比すれば、つかみどころのない思想である。しかし、実際にこれらの明らかに終わりのない集団闘争の中に埋没してしまって、より大きな統合についての見通しを失ってしまうならば、それは間違いなく深刻な誤りとなってしまう。

コントの社会的統合についての考察は、有機体的あるいは自然主義的な類推のみではなく<sup>24</sup>、同意あるいは心理的なコミュニティにも基づいている。その中で、最近精緻化されてきた概念は後者の方である。社会ないしは集団の精神 (spirit) という考え方は、新しいものではない。その考え方は古くからある哲学的な思考である。時代精神 (the *Zeitgeist*)、民衆意識 (the popular will)、世論 (public notion) といった言葉は、社会心理学が登場するずっと前からありふれていたものである。スペンサー、シェッフレ、そしてリエンフェルトは、社会の心理的な性質を認識していたにもかかわらず、そのことに対する着目は、あまりにも、彼らの分析の片隅に置かれたままであった<sup>25</sup>。彼らは、誰か他の人たちが分析しようとすることを想定していた。社会意識についての概念は、ますます重要な役割を担いつつある。こ

<sup>18</sup> Novicow, *Les luttes entre sociétés humaines et leurs phases successives* (Paris, 1893).

<sup>19</sup> Sighele, *La psychologie des sectes* (Paris, 1898).

<sup>20</sup> Marx, *Zur Kritik der politischen Oekonomie*, Introduction, p. v. (=1951, マルクス=エンゲルス選集刊行会編『経済学批判』マルクス=エンゲルス選集, 補巻3, 大月書店ほか)。

<sup>21</sup> Loria, *Les bases économiques de la constitution sociale*, 2nd ed. (Paris, 1893), pp. 17 f. (=1909, 平沼叔郎訳『社会の経済的基礎』大日本文明協会)。

<sup>22</sup> Vaccaro, *Les bases sociologiques du droit et de l'état* (Paris, 1898), pp. 79 f.

<sup>23</sup> Simmel, "The Persistence of Social Groups," *American Journal of Sociology*, March, May, and July, 1898 (=1994, 居安正訳「集団の自己保存」ジメル著・居安正訳『社会学』下巻, 白水社に所収)を参照。

<sup>24</sup> Comte, *Cours de philosophie positive*, Vol. IV, p. 460. (=1980, 霧生和生訳「社会静学と社会動学」『コント・スペンサー』世界の名著46, 中央公論社)。

<sup>25</sup> しかし、シェッフレ (Schäffle) が、リーダーシップ及び権威に関する研究と、それらに対する公衆 (public) と集団の反応に関する研究において、社会心理学に重要な貢献を果たしたことについては明記しておく必要がある。—*Loc. cit.*, Vol. I, pp. 205–31.

の概念は、民族心理学 (*Völkerpsychologie*) の創始者であるラザルス (Lazarus) やシュタインタール (Steinthal) の場合、やや曖昧な概念であったが、徐々に具体的で明確なものになりつつあり、いずれは現在の社会学的研究において最も実りある領域とみなされるまでになるかもしれない。このような理論が必要とされた理由は、生物学的な学派が社会的統合に関して十分な説明をすることに失敗したのをみれば明らかである。ほぼ完全に経済的な問題である分業や相互依存だけをとっていても、要請されることが余りにも多く残されている。

ラザルスは、「民衆 (a people) とは、自分のことを民衆だと認識する人々の集まりのことである。民衆とは、それを構成し、それを絶えずつくりだす人々たちによる精神的な成果のことである<sup>26</sup>」と述べているが、このような漠然とした言葉を起点に考察を進めていくことは、この問題を徐々に終結へと向かわせるためには有益である。ルイス (Lewes) は啓発的な言明を数回行った。ヴント (Wundt)、ジェームズ (James)、そしてボールドウィン (Baldwin) のような心理学者は、新しいフィールドへと否応なく引きずり込まれた。こうして、集団の意志や感覚、そして行為について、正式に研究が始められた。タルドは、模倣 (imitation) と抵抗 (opposition) そして創造 (invention) の過程を明らかにした。ギディングス (Giddings) は「同類意識 (consciousness of kind)」を寄稿し、「社会意識の統合 (integration of social mind)」についての概要を述べた。ジンメル (Simmel) は集団のまとまりを、共通のシンボル (common symbols)、服従 (obedience)、忠誠 (loyalty)、そして集団の名誉についての意識 (consciousness of group-honor) に基づいているものとした<sup>27</sup>。オーリウ (Hauriou) は、分析上の単位が (1) 集団形成 (grouping) および集団形成についての感覚、(2) 個性 (individuality) および個性についての感覚、そして (3) 調停 (conciliation) に分解されることを示唆した<sup>28</sup>。ボールドウィン (Baldwin) は個人と社会の成長についての「弁証法 (dialectic)」を提示した。そしてロス (Ross) は、社会統制についての洞察力に富んだ、分析的な研究を著した。さらにボリス・サイディズ (Boris-Sidis)、ル・ボン (Le Bon)、ロス (Ross)、タルド (Tarde)、およびシゲレー (Sighele) は、心理的感染 (mental epidemics) と群衆の暴力 (mob violence) を提示することで、集団の病理心理学 (morbid psychology) に重要な貢献を果たした。

これらの各々違いのある理論は、一見すると多様で対立を含んでいるようにみえるが、これらの理論は実際のところ、多くの場合において補完的であり、これらが合わさることで望ましい有効な理論を提供してくれる。これらの理論が示唆する事柄は、基本的に重要な役割を果たすものとして認識されている。感情的な省察の劣位、習慣の持続、非意図的な力の優位、リーダーシップの機能、集団がめざす理想による統制、集団が直面する状況の変化に応じた理想の修正、成員を言いくるめて集団に同調させるための工夫、これらは全て、集団の形成と活動に関する心理学の中に含みこまれる事項であり、この心理学はまさに、全ての社会科学の仮定を刷新させるものである。「統治の合意 (consent of governed)」理論、価値の理論 (the theory of value)、所有の概念 (the idea of property)、主権 (sovereignty)、不可譲の権利 (inalienable right)、自由意志 (free-will)、これらは全て、社会心理学の守備範囲でなくてはならない。実際のところ、科学としての社会学は、このような結合についての心理学に過ぎないことが明らかになるだろうと言い出しさえする者までいる。

この、集団の心理的性質はもう一つの基本的な問題をも示唆している。それは、個人と社会に関する

<sup>26</sup> Lazarus, *Das Leben der Seelen*, Vol. I, p. 372.

<sup>27</sup> Simmel, *loc. cit.*, March, 1898, p. 66.

<sup>28</sup> Hauriou, *La science sociale traditionnelle* (Paris, 1896), pp. 7 f.

問題のことである。コントに関して言えば、彼は、個人を抽象的な概念として、そして社会を唯一現実的なものとみなしていたと言われている<sup>29</sup>。その一方で、イギリスの学派における徹底的な個人主義者は個人だけに着目し、社会自体は抽象概念だと考えていたことがはっきりと断言できるかもしれない。コントにとっては、個人ではなくて家族が、社会有機体の基本的構成単位であった。スペンサーは時折、家族をひいきするがゆえに常識外れの行動をしていたにもかかわらず、個人は動物の身体における細胞に対応するものだというアナロジーを提示していた。スペンサーは自身の政治的見地により、必ずしも生物学的な推論と常に調和するわけではない伝統的な個人主義に固執することとなった。彼が考察と計算の一単位としての個人という古典的な個人主義の考えの方を好んだことによる影響は、彼が自身の目的のために、意図的に多くの他者 (society) と協力体制を組んだこと、そして、彼自身の関心と彼以外のそれとを適切に比較考察したことに現れているといわれる。ルソーの政治哲学は全体的に、フランス革命に媒介される形で、この個人についての理論と調和していった。奇妙なことに、カーライル (Carlyle) の「偉人 (great-man)」についての教義はスペンサーに、社会進化についての彼の生物学的な概念を擁護するための論理を与えた。スペンサーは進化の過程の連続性を主張し、因果関係の均一性を正当化するために、「偉人」はその人が生きていた時代や所属していた社会集団によってつくられたのだと説明することを余儀なくされた。これは、理論が常に彼の政治的信条の内容と一致するわけではなかったことを示す一例である。この「偉人」についての議論が下火になる前に、ウィリアム・ジェームズ (William James)<sup>30</sup>、フィスク (Fiske)<sup>31</sup>、そしてグラント・アレン (Grant Allen)<sup>32</sup> も、この論客のリストの中に名を連ねていた。後にジェームズの『心理学』において、「社会的自我 (social self)」が、示唆的かつ啓発的な形で扱われることとなった<sup>33</sup>。これは、様々な研究者によってなされ、個人とパーソナリティの概念を激変させた一連の研究の始まりに当たるものである。同様の問題は、生物学的社会学に由来する有機体的な思想を抽象化するマッケンジー (Mackenzie) の試みとも、部分的に関係していた<sup>34</sup>。有機体説の構成要素の一つとして、例えば個人と社会のように、「部分と全体の中に内在する関係」があげられる。この「内在的 (intrinsic)」という概念において不可欠な思考法とは、あるものは他のものから意味を付与されるということである。個人は、自分が属する集団の中でのみ理解され、集団は、それを構成する個人から離れたところでは意味を持ち得ない。この見方においては、社会だけでなく個人もまた、両者を包摂している複合的な構成体 (complex unity) を抽象化したものだということになる<sup>35</sup>。この一般的なテーゼは、数人の社会心理学者によって開発されたのであるが、なかでもボールドウィンとクーリー (Cooley) のそれは際だっている。ボールドウィンはパーソナリティの成長を、社会集団とのギブ・アンド・テイクのプロセスであると説明している。これは、個人の創造性 (inventions) と個別性 (particularizations) によってアイデンティティが形成されるという見解をさえぎる、統一的な見解を生み出す。社会は、物事を一般化したり、それらの個別性を模倣したりすることによって発達する<sup>36</sup>。このプロセス

<sup>29</sup> Barth, *loc. cit.*, p. 55.

<sup>30</sup> James, "Great Men, Great Thought and the Environment," *Atlantic Monthly*, October, 1880.

<sup>31</sup> Fiske, "Sociology and Hero Worship," *ibid.*, March, 1881.

<sup>32</sup> Allen, "The Genesis of Genius," *ibid.*, March, 1881.

<sup>33</sup> James, *Psychology* (New York, 1890), Vol. I, pp. 291-95. (=1927, 今田恵訳『心理学』岩波書店)。

<sup>34</sup> Mackenzie, *Introduction to Social Philosophy* (New York, 1890), pp. 127-82.

<sup>35</sup> Cooley, *Human Nature and the Social Order* (New York, 1902), chap. i. (=1921, 納武律訳『社会と我一人間性と社会秩序』日本評論社)。

<sup>36</sup> Baldwin, *Social and Ethical Interpretations in Mental Development* (New York, 1897), pp. 7-9, 455-65.



についての見解は、全体的にタルドの見解とほぼ一致しているものの、タルドによる社会的人間についての心理学的な分析は、洞察力や詳細さの面で大いに劣っている。この、個人を即座に社会的生産物であり社会的要素であるとする見解は、人間を所属集団からほぼ独立した存在だとする古典的な個人主義と、個人とは自分自身でコントロールのできない社会的な力 (social forces) の結果に過ぎないのだとする社会的運命論との中間にある、合理的かつ科学的な論理 (mean) である<sup>37</sup>。

新しい社会心理学には、研究動向の画一化を過度に強め、集団の成員に個性を与える力が実体として把握されていない事実を看過する危険性がある。しかし、最近ではむしろ、個人間の違いに関する事実ならびに原因の方が研究される傾向にある。性別<sup>38</sup>、民族、気質、そして職業の違いによる影響について研究されている。パッテン (Patten) はイギリスの社会進化を、それぞれの時代において支配的であった次の四つの個人的類型—執着心の強い人々 (clingers), 快楽主義的な人々 (sensualists), 信念の強い人々 (stalwarts), 優柔不断な人々 (mugwumps)—という側面から説明している<sup>39</sup>。ギディングスは性格 (character) を、四つのカテゴリー—強気な性格 (the forceful), 陽気な性格 (the convivial), 禁欲的な性格 (the austere), そして理性を伴った良心的な性格 (the rationally conscientious)—に分類している<sup>40</sup>。ラツェンホーファーは、彼自身による三つの大分類—正常 (the normal), 異常 (the abnormal), 知能障害 (the defective)—からさらに九つの小分類に区分される、個人の先天的な差異にのみ着目していた<sup>41</sup>。社会制度と職業が個人の差異に与える影響については、多くの調査者および研究者によって、示唆に富むやり方で分析が進められている。これらの論文の大多数は、まだ試論的なものでしかないけれども可能性に満ちている。今日の社会学者が認識するような個人は、一般にいわれるような、譲ることのできない権利 (inalienable rights) を持ち、不思議な理性 (preternatural rationality) を持ち、そして、制約のない自由な意志 (unhampered will) が通用する存在であるなどといった、19世紀の「社会契約 (social contract)」に起源をもつ観念とは著しい違いがある。

物理的な環境が社会組織と社会的活動に及ぼす影響は、長いあいだ議論的となってきた。物質主義と理想主義を対比させることは、政治 (politics) と共和制 (republic) の対比と同じくらい古典的である。果たして人間は、地形や土壌、それに天候の創造者なのであろうか、あるいは、自身の運命の支配者なのであろうか。重農主義者 (the Physiocrats) とモンテスキューは物質主義に、今世紀まで十分に持ちこたえるほどの勢いを与えた。コントは社会進化の主観的な側面の方に関心を持ち、その結果彼は、客観的な側面にはあまり着目しなくなった。ところが、19世紀半ば頃における自然科学の急激な発展は、社会および個人の違いに対する自然主義的な解釈を、再び重要な地位へと押し上げた。バックル (Buckle), ギーヨ (Guyot), およびドレーパー (Draper) はこの見解を、永続的な自然の力が完璧なものであるだけでなく、あたかも直接的なものでさえあるかのように見受けられる極端な見解へと推し進めた。例えばバックルは、人間の「自然に対する見方 (aspect of nature)」というのは、自然が人々に与えた影響を、直接的かつ容易に認識できるやり方で彼らに刻みつけたものであることを主張した<sup>42</sup>。しか

<sup>37</sup> 個人についての古典的な理論から新しい理論への移行に関する明解な説明は、オルモンド教授 (professor Ormond) の論文「社会的な個人」 ("The Social Individual," *Psychological Review*, January, 1901) を参照。

<sup>38</sup> Thomas, "On a Difference in the Metabolism of the Sexes," *American Journal of Sociology*, July, 1897; March, 1898.

<sup>39</sup> Patten, *The Development of English Thought* (New York, 1899), pp. 23-32.

<sup>40</sup> Giddings, *Inductive Sociology* (New York, 1901), pp. 82 f.

<sup>41</sup> Ratzel, *Die soziologische Erkenntnis*, pp. 260-71. (=1924, 宮崎市八訳『社会学的認識論』新潮社)。

<sup>42</sup> Buckle, *History of Civilization in England*, 2nd ed. (New York, 1863), Vol. I, pp. 85 f.

し、ラッツェル (Ratzel) やリプレー (Ripley) のような地理学者による慎重な研究ならびに機能的な解釈によって、また、フランスのル・プレー (Le Play) 学派の貢献によって、自然が社会の特性に直接的な影響を及ぼすことを唱える理論に対して反論が導き出された。ル・プレーと彼の後継者たちは、環境が与える影響というのは、状況 (conditions)、活動 (activities)、そして制度 (institutions) を交えた長い間の積み重ねを通して、間接的かつ複合的な形で媒介されるものであり、場所 (place) から始まり、文明化の度合い (the scale of civilization) に応じた社会の序列 (rank of society) に行きつくものであることを主張している。ヴィーニュ (Vignes) は、この学派の主要なテーゼとは、自然が仕事と報酬の内容を規定し、そこからさらに社会の形成と人口の差異の発生につながっていくという点にあったことを述べている<sup>43</sup>。ドモラン (Demolins) は最近の論文において、ル・プレーの理論が、フランスにおいて異なる地方の類型がつけられることに対してほぼ完璧に応用することができ、また、世界の中で主導的な位置にいる民族集団についてはほぼ完璧に説明できることを述べている<sup>44</sup>。同様の傾向は合衆国においてもみられ、シェーラー (Shaler) やブリガム (Brigham) のような科学者、ハート (Hart) やターナー (Turner) のような歴史学者、リプレーやセンプル女史 (Miss Semple) のような地理学者、そしてギディングスのような社会学者らは、環境が及ぼす影響力の問題について研究を続けている。一般的に、環境による直接の影響という論点を避け、社会制度を通じた間接的な影響についての理論へと向かう傾向があるのは、社会学が科学としてだけでなく、すべての社会科学に影響を及ぼす社会哲学としても、ますます重要な位置を占めつつあることに大きな原因がある。

社会進歩 (social progress) の概念は、すべての社会哲学者にとって基本的な論点である。ヴィーコが唱えたらせん状の進化にしる、コンドルセが唱えた直線的な進化にしる、人間が進歩の道筋をたどるということは、欠くことのできない要件であった。ド・グリーフは、19世紀において伝承されてきた財産の一つであるこの概念の、歴史的な起源と発展の足跡をたどった<sup>45</sup>。ルソーによる「自然に帰れ」という言明と、純粹無垢で輝いた年齢段階についての指摘は、この楽観的な夢に何の手も付けられないことなく、無視されたままの状態になった。コントは進歩のことを、三段階の法則で捉えられる知的な営為 (intellectual movement) によって条件づけられるものだとしているが、彼は社会学を、静態的なものと動態的なものに区分することによって、進歩についての新たな語法を提示した。実証主義が行き渡ることで、最終的には静態的な秩序のもと、あらゆる主張の違い—現在は「知の無秩序状態 (intellectual anarchy)」だといえる—は消滅し、隅々まで完全に調和した状態になるであろう。社会変動によって描かれる進化についての思想は、19世紀の社会学におけるまさに中心的な概念である。この概念はいかなる場においても支配的であるため、あらゆる問題は発展的な (developmental) 教義の文脈で述べられ、場合によっては同じことが繰り返して述べられることもある。しかし、進化 (evolution) と進歩 (progress) は決して同義語ではない。スペンサーはいつの間にか、彼の進化 (evolution) に関する法則の中に、場合によっては進歩 (advance) の法則として仮定した方がよいような若干の基準を発見した。論理の異質性 (heterogeneity)、論理の首尾一貫性 (coherence)、論理の明快さ (definiteness) といったものは、しばしば社会進歩 (social advance) の分析によって調整されてきた—しかしながら、こういった論理は抽象的であり、応用するのが困難である。しかし、スペンサーは実際に、彼がその社会に特徴的な地位と契約

<sup>43</sup> Vignes, *La science sociale, d'après les principes de Le Play* (Paris, 1897), pp. 57–63.

<sup>44</sup> Demolins, *Les Français d'aujourd'hui* (Paris, 1898); *Comment la route crée le type social* (Paris, 1901).

<sup>45</sup> DeGreef, *Le transformisme social* (Paris, 1893).

の内容に基づいて分類した、軍事主義 (militarism) と産業主義 (industrialism) という二つの社会類型に自信を持っていた。ここに信頼できる基準が存在したわけである。産業の自由と自由な契約に向かう動きがある社会は進歩の過程にあると判断できる一方で、軍人による独裁政治に向かう傾向がある社会はいずれも、退化の兆しがある。ウォード (Ward) は、知性に基づく統治は未来への導きとなる (guiding) 有力な手段であるという、コントの理論について指摘している。Telesis—目標をともなった社会的行為—は、genesis—意図的ではなくひとりでの起きる社会の成長—と対比され、船舶があらかじめ定められた航路をたどることと、氷山が漂流するだけであることとの違いにたとえられる<sup>46</sup>。ウォードにとって正確な知識の普及は、進歩のための機械的な手段である。この問題は科学的であるというより哲学的であることを認めるギディングスは、社会進化 (social evolution) のなかに、進歩の三つの段階 (three progressive stages)—すなわち、(1) 政治的な集権化 (political centralization)、(2) 批判精神と自由 (criticism and freedom)、(3) 産業的・倫理的な発展 (industrial and ethical development)—があることを見出している<sup>47</sup>。彼はこれらの概念によって、進歩の程度 (degree of advancement) と、特定の集団 (a given people) および社会の傾向を分析しようとした。

A. J. バルフォア氏 (Mr. A. J. Balfour) が 1892 年に行った講演の内容によると、彼は進化について一般的に知られている信念を、生物学の議論や、知識の増加、そして倫理性的の向上に関する議論を次々と引き合いに出しながら分析を行った。そこでの彼の結論は、進化を予言するような合理的あるいは厳密な科学的根拠はないというものであった<sup>48</sup>。この見解は、一種の特権階級 (class) としての社会学者にとっては受け入れ難いかもしれない—ただし、彼らは実際のところ、自分の研究が社会的な有用性を持つことを期待している。しかしその一方で、彼らの現在の関心事は、広い世の中の動向についての漠然とした哲学的一般化というよりむしろ、具体的な社会的事象に関わる、より明確な科学的研究の方に移っているといえるかもしれない。彼らは世界理論 (world-theories) の形成よりも、変化の法則の方に携わっている。これは現在のところ、注目すべき一般的な傾向だと言える唯一の事柄である。

科学としての社会学における独自の射程範囲と現象についての考察が、まだ手を付けられていないまま残されている。ギディングスは社会学を、「その内容が社会的事象を構成する諸要素と第一原理で満たされる、一般的ないしは基本的な、社会を対象にした科学」であり、詳細な研究の成果を、特殊社会科学 (special social sciences) に提供する科学であると述べている<sup>49</sup>。この観点からすると、生物学が動物学、植物学、解剖学、そして生理学を支えているように、社会学もまた、他の社会科学と同じような関係になり得ているということになる。一方でスモールは、社会学を「全ての社会科学を総合化したもの (synthesis)」であるとし、他方で社会学者を「特殊社会科学の結論を整理し、これらの科学からのデータを、首尾一貫した社会哲学において体系化させること」に従事する人々であると規定した<sup>50</sup>。両者の見解は一見したところ、矛盾しているようにみえるかもしれないが、実際には全く矛盾するところがないのである。社会学は科学でもあり哲学でもあるのである。さらに言うと、社会学は結合についての法則を発見しなくてはならないのであるが、これらの法則は、特殊社会科学によって分析され体系化される

<sup>46</sup> Ward, *Pure Sociology* (New York, 1903), pp. 463, 465. (=1924, 石川功訳『純正社会学』上下, 新潮社)。

<sup>47</sup> Giddings, *Principles of Sociology*, pp. 299 f. (=1929, 内山賢次訳『社会学原理』世界思想全集第 37 卷, 春秋社)。

<sup>48</sup> Balfour, "A Fragment on Progress," *Essays and Addresses* (Edinburgh, 1893).

<sup>49</sup> Giddings, article on "Sociology," Johnson's *Encyclopedia*, ed. 1895.

<sup>50</sup> Small, *loc. cit.*, pp. 54 f.

具体的な事実からのみ発見されるのである。これらの考え方を対比させるならば、つぶさに現実を観察すること (fundamental view) により、原理 (principles) との関わり方が修正される一方で、「総合的 (synthetic)」な理論 (theory) もまた、政策提言と実践に向けて、複数の学問分野にまたがる領域を観察している、ということになる。

繰り返しになるが、社会学のみが対象とする現象については様々な形で認識されている。ド・ロバート (De Roberty) の「社会性 (socialité)」, グンプロウィッチの「葛藤」, ド・グリーフの「契約 (contract)」, スペンサーの「協働 (co-operation)」, タルドの「模倣」, デュルケム (Durkheim) の「強制 (coercion)」, ジンメル の「下位 (subordination)」, ギディングスの「同類意識」といった諸概念は、一見したところ、思考がカオスの状態になっているように見えるかもしれない。しかし、分析によってこれらの概念は、実は社会集団についての多様な構造と活動の諸相を示しているに過ぎないことが明らかとなっている。これらの概念は、全ての社会組織の類型に共通する多種多様な側面なのである。これらの側面がほぼ全て心理的なものであるという事実は、科学的な社会学の傾向に対して重要な意味を持っており、しかも、これを社会心理学と同一化させるのに大いに寄与している<sup>51</sup>。

社会学者たちは、例えば経済学者の場合と比較して、学問の内容について合意を形成するまでには至っていない。しかし、雑多な用語を縮減することができるならば、現在の明らかに混乱した状況の中から重要な合意が生じ、その範囲は絶えず拡大していくことになるであろう。したがって、一般的に、社会学に関して全面的な合意が得られている事柄といえば、それが (1) 身体的 (physical) ないしは心理的 (psychical) な力によって生成されるものを扱い、(2) 進化の過程 (evolutionary process) に従事することであるが、ここでいう進化の過程とは、(3) 当初はほとんど直感的な活動であったものが、後に、ある程度 (4) 自己省察的 (reflective) で目的的な政策に取って代わることである。この見解において社会とは、(5) 特殊ではなく一般的な語幹で言うところの、有機体的なものである。共通する心的生活 (mental life) の一形態としての社会集団に関して、より合意が進んでいることは、(1) 個々人が極めて個人的な成長を遂げるうちに、無意識的に自分たちの所属する集団の規範を受け入れているということ、さらに、個々人は (2) 強制的に集団に順応させられているということである。模倣によって統合へと向かう影響力と、集団内の上昇をめぐる競争 (group ascendancy) は、(3) 全ての成員に選ばれるかあるいは支持され、新しい発想と活動を創造するリーダーあるいはオーソリティの存在によって、互いにその力を打ち消し合うことになる。このようなリーダーとその後継者たちとの間では、(4) 地位の上昇をめぐる闘争 (struggle for ascendancy) が、いずれは起きることになる。その結果、最終的には、(5) 比較的持続する慣習と、人々の感覚の中に埋め込まれた制度—例えば集団の伝統ないしは特質である—の具現化がもたらされることとなる。その際、集団の成員が共通の理想と目標を認識するのであれば、(6) 社会意識 (social consciousness) が発達することになる。

科学の評価基準が法則の定式化と予言力を持つことにあるのだとすれば、社会学は、科学における高い地位へと向かう道を、あまり遠くまで進むことはないであろう。紋切り型のこのような法則は、多少なりとも自明か平凡のいずれかである場合があまりにも多く、また、厳密な意味において科学的であるというよりは哲学的である。しかしながら、特に社会心理学の分野においては、より満足のいく成果が達成されつつある。原理については、洞察力と正確さに関して、経済学の絶対的な法則に限りなく接近

<sup>51</sup> Caldwell, "Philosophy and the Newer Sociology," *Contemporary Review*, September, 1898 を参照。

することが奨励されており、また、このような方向で進歩するという見込みは全くないわけではない<sup>52</sup>。だが、諸原理の体系化を前提とする予言については、社会学者は自ずと、既存の具体的な事例についての結果を予測することに対し、経済学者よりもやや慎重になる。社会学者が、科学的原理をベースにこれを教義にすることを正当化されたところで、核心に到達しないのは間違いのないところである。

本稿では、社会学の発展について駆け足で分析を行ったわけであるが、これにより、ある一定の傾向が、比較的明瞭な輪郭をもって浮かび上がってきた。以下にその概要をまとめることにする。

社会学は、社会哲学ないしは歴史哲学にその起源があり<sup>53</sup>、しかもそのような状態はつい最近まで続いてきた。社会哲学を自然科学の言語に置き換えたところで、それは科学にはならない。しかし、この学問は哲学であるからこそ重要な貢献をしているのである。社会哲学は社会理論のまとまり (unity) を保っている—ただしそのまとまりは、現象の異なる属性 (groups) を概念化する専門化の流れによって、常にその存続を脅かされている。社会哲学は、全ての社会科学が自覚的であるにしろないにしろ影響を受けるような視点を提供している。

近年、社会学は、社会全体についての漠然とした、包括的な考察にあまり気をとめなくなりつつある。そして、その立ち位置を、実際の結合に関する諸現象に移し始めている—特に社会心理学の場合にこれが当てはまる。葛藤によって特徴づけられる闘争集団に対して注目が集まっている。集団の精神的な統一 (unity) と、その形成の過程について研究が進められてきた。この、個人と社会の関係に関する理論は再検討がなされ、そして急激に改良が進んだ。環境は直接的ではなく、複合的かつ間接的な形で社会に影響を与えると考えられている。長期的なプロセスについての漠然とした概念は、秩序と変動に関する現状及び法則についての、より慎重な研究に取って代わられつつある。最後に、社会学は科学としての貢献とともに、妥当性のある法則を体系化して、結合に関する現象の背後にあるユニバーサルな原理を導き出すという、哲学としての貢献をつけ加えられるように模索を続けていることを付言しておきたい<sup>54</sup>。

<sup>52</sup> Ross, "Recent Tendencies in Sociology," *Quarterly Journal of Economics*, August, 1902 を参照。

<sup>53</sup> Barth, *loc. cit.*, pp. 10-13.

<sup>54</sup> コールドウェル (Caldwell) の言及を、ここに引用しておくことにする。「今日の社会学は、部分的には哲学の理論であり、部分的には科学であり、そして部分的には、社会進化と呼ばれる傾向に関わる教義 (gospel) なのである。それは、社会と呼ばれる組織の性質と発展についての理論であり、結合の原理に基づく人間の行動を明らかにする理論なのである」。—*Loc. cit.*